

連載 亀ちゃんにも言わせてよ！

気になる空気

鴻池発言

長崎で起きた12才の少年による幼児殺害事件について、鴻池祥肇防災担当相が記者会見などで、「罪を犯した少年の親は市中引き回しのうえ打ち首にすればいい。」とか「14歳未満の子は犯罪者として扱われないのだから、親・担任・校長先生は全部前に出てくるべきだ。」などという趣旨の発言をしたことは記憶に新しいことと思います。(編集部注：03.8月号参照)

この発言については、「何を言っているんだかな、この人は。」と、私は思いました。いやしくも、政府の少年育成推進本部副本部長を務めている者の発言としてこのような内容の言葉が出てくること自体、少年非行の根元的原因の一つではないかと思えます。すなわち、政府の少年非行対策は、少年非行について無知・無理解の者に任せてもかまわないという程度の認識の上に立ったものであり、本気で取り組む姿勢が感じられないということです。ですから、先の少年法改正時においても、少年非行の根っこにあるものを掘り下げてじっくりと議論を重ねて日本中の市民が参加するかたちで対策を練るのではなく、最もわかりやすいかたちで(一般受けしやすいかたちで)表面だけをさらって(時間をかけずに)施策(刑罰化)を講じたのではないのでしょうか。もっとわかりやすくいえば、お手軽な方法でその場を取り繕ったということです。これが問題を先送りしただけで何の解決にもならず、そればかりか問題をさらに深刻化させる結果となることは、少年法改正後の少年犯罪の動向から推し量ることができます。

さて、鴻池発言自体よりもさらに、この発言に関係して気になることがありました。

親の責任追求への共感が

8月9日付朝日新聞の「be」(朝刊に一緒に折り込まれている)に一連の鴻池発言に共感するかしないかのアンケートの結果がありました。5221人の回答で、共感しないが37%・どちらかという共感するが22%をあわせて59%であるのにたいして、共感するが8%・どちらかという共感するが33%をあわせて41%でした。大雑把に言えば、6割が共感してないのたいして4割が共感しているということです。

鴻池発言に約4割の人が共感していることには驚きましたが、さらに驚いたことに、子どもの犯罪の責任は誰にあるのかとの問には、共感している人の87%が親とし、共感していない人の69%が親とすることでした。この鴻池発言に共感はないが親に責任があると考えたひとは、具体的にどう考えているのかは記事からはわかりません。たんに、打ち首だとか市中引き回しということが不相当でありそれなりの罰ならば加えてもよいということなのでしょう。気になります。

親の責任をいう前に

親の責任を口にする者の多くは自らの子どもが深刻な非行を行った経験がない人々ではないかと思えます。当たり前のことですが、親といっても様々であり、これが理想の親であるとは誰も言うことはできません。それに、どの親もその人なりに一所懸命子どものために頑張っているのではないのでしょうか。自分の子どもを犯罪者にしようとする親がいるとは思えません。仮にいとすならば、それは少年の責任を親がとるのではなく、はじめから大人(親)の犯罪として捉えるべきです。少年非行は家庭が悪いから親が悪いというのは短絡的というより、無知・無理解です。相手の置かれている状況を推し量ることもせずに批判するのは簡単です。しかし、それは直接の被害者とはかかるとして、第三者の

立場ではあまりにも思いやりに欠けているのではないのでしょうか。思いやりのない社会が少年にとってよいとは思えませんよね。

非行少年の親の責任を問う前に、少年の親がどのような環境に置かれていたのかといったことを考えることが必要です。いまの日本が子育てに最適な状況にあると言える人はいるのでしょうか。無理をしなければ子育てできない社会を考え直してみてください。毎日の生活が子どもも大人も無理をしなければならぬなんて、おかしいと思いませんか。安易に犯人探しのよう責任の所在追求をするよりも、社会のあり方そのものを見直すことを考えましょう。

“ 急がば回れ ”

亀山憲一 [会員・フリーで活動中の法学研究者 (犯罪学・刑事法)]